西田正好先生の学問

都築久義

西田先生は国文学の研究者であったが、世にいう国文学者とはその問題意識も研究方法も異にしていた。西田先生はつねに原理・原則や根源・本質を追求し、芸道・宗教・美術・哲学等々、およそ精神文化にかかわるすべての領域に目を向け、全体を俯瞰しつつ歴史的流れを把握し、そこに一貫するものを探ってそれを体系化しようと試みた。世の多くの国文学者たちが、作品の訓詁註釈に終始したり、異本の異同の調査・校訂に没頭したり、旧家の土蔵か図書館から古文書を引っ張り出して翻刻ばかりしていたり、瑣末な考証に走ったりしていることに、西田先生はしだいに異和感を感じ不満をいだき、やがて国文学界とはほとんど没交渉になり、一人で自分の道を切り開いていった。晩年の西田先生は、学者というよりも思想家か求道者のようにわたしには思えた。

西田先生が早稲田大学文学部に入学したのは、昭和二十五年四月である。わが国は、占領下を脱して独立を達成しようとしていたときであり、敗戦後の経済的不安定からようやく安定に向かいつつあったが、世界的にも米ソの対決が表面化し、国内でもイデオロギー的対立が表面化し、社会的には混乱期であった。いわゆる進歩的学者・文化人が論壇を制覇し、大学生は全学連に結集して学生運動がはなやかに展開されていた。西田先生が早稲田という学生運動のメッカにいて、どの程度のかかわりを持っていたかは聞かなかったが、時代の風潮には無縁でありえなかったようだ。『淑徳短大新聞』（昭44・10・22発行）に寄せた一文で、「ともあれ、念願どおり早稲田の文学部に進学できた私はご多聞にもれず、マルキシズムを中心とする社会科学にたぐならぬ関心をいだかされました。たまたま同じ学生下宿

にその道のかなりのエキスパートがおり、もとより相当の腕ききでしかも若くして大器の風格を具えていた彼は、まるでこの私を手玉に取るように、マルクスへの道を性急にたどらせようとしました。」と告白している。愛知淑徳大学創設の際に文部省へ提出した「教育研究上の業績一覧」の論文の項の最初に、「文学研究の方法論的諸前程」（『文学叙説』昭28・4）が載っており、概要欄に「文学研究法をめぐる学説の対立も整理統合し、歴史社会学的方法による文学の合理的研究方法を提示したもの」とあり、次いで卒業論文の「封建革命期における文学の変革過程」（29・1）が出ている。いずれも未見だが、西田先生の視点は察しがつく。ここに西田先生の出発期における志向とマルクス主義の影響が如実にうかがえる。

昭和二十九年四月、大学院修士課程へ進学。指導教官は仏教説話の伊藤康安教授と岡一雄教授。岡教授は「源氏物語」研究の権威であるが、「学風は文献学的成果を踏まえて作家の創作心理の内奥と作品のイデーとを、傑出した解釈力で実証的に追体験し、作家と作品にたいする文芸科学的な価値判断が究極の目的となっているが、一方比較文芸学的発想によって文学現象の相対的認識を志向する点で独自のものがある」（『日本近代文学事典』）学者。西田先生は師の専門と学風をそのまま受け継いでか、修士論文は「源氏物語の文芸学的研究」。ただし、その後は「源氏物語」の研究をめざしたのではなく、文芸学の方に興味と関心を寄せたところに西田先生の特徴と師のもうひとつの学風の投影が見られよう。昭和三十一年四月、早稲田を出て郷里・名古屋に帰って金城学院に務めるが、「現代文学理論の根本にあるもの」（昭32・6）、「文学批評の探求」（昭32・9）、「文学はいかに学たり得るか」（昭33・1）と、矢継ばやに小冊子を自費で出し、東西の文学理論を渉猟しつつ自らの理論の確立を模策した。マルクス主義、フロイト主義、実存主義を視野に入れての西田先生の論考は、いかにも巨体の西田先生にふさわしくスケールが大きく、とかく微視的になりがちな国文学界では異色であった。

西田先生がフロイトに傾倒し、精神分析に熱中したことは、若き日の西田先生を知る人の間では有名である。精神科医とも交際し、ノイローゼ患者の治療や相談にあたっていたとわたしも聞いた。西田先生によれば、「精神現象としてこの文学を社会科学ひとつで裁断することを、さながら鋸で豆腐をきざむように野暮くさく思った私は、同じ大学時代に、これまた多少とも主任教授からの示唆を被ってマルキシズムとはおよそ対照的に、主として心理学を方法とする文学研究をめざして反転」（前掲『淑徳短大新聞』）したという。精神分析学をテコとした論文も、早稲田大学

国文学会機関誌『国文学研究』（昭34・3）に載せた「エロスと文芸」以下数篇ある。特に昭和三十八年四月号『国文学』に発表した「太宰治の深層心理学的診断」は、たまたまわたしも「太宰治論」を卒業論文として書いた直後だったので強く印象に残っている。

しかし、この頃はすでに西田先生は、精神分析学や精神医学にも絶望して、宗教と宗教文学の世界に足を踏み入れていた。その理由については、「ひとびとを救おうという尊大な精神医学の姿勢を、私はまたもや例の『猜疑心』によって肯んずることができなくなったのであり、本物の人間救済は宗教的絶対者とのかかわりのうちでしか得られぬもののように思えたからだとだけ白状して、お許しいただきたいと思います。」（前掲『淑徳短大新聞』）としか述べていない。が、もう少し前のところで「文学にたずさわる者の重責のように人間の『救い』の問題をかなり早くから気にしだしたわけです。」と言っている。ここに西田先生の文学研究の原点があるとすれば、西田先生が宗教と宗教文学の世界に向かったのも当然の帰結であったともいえよう。そして、宗教色が最も豊かだった日本の中世が、当面の研究対象になったのもいわば必然の道程だったわけである。ともあれ、昭和三十六年十月、早稲田大学国文学会で「古典における愛」と題して、古典の愛に見られる自己否定と宗教との関係を研究発表したのを皮切りに、翌三十七年には創設されたばかりの愛知淑徳短期大学に招かれて同短大の研究紀要と国文科の機関誌に、「法門の栄華――古代精神史の末路」（昭38・3）以下、毎号関連論文を載せた。それらはのちに、『乱世の精神史――中世日本の思想と文化』（河出書房、昭41・2）、『中世的人間像――中世日本の思想と人物』（同、昭42・4）、『仏教と文学』（桜楓社、昭42・9）の三部作にまとめられ、さらに『無常観の系譜――日本仏教文芸思想史――古代・中世編』（桜楓社、昭45・2）、『無常観の伝承――日本仏教文芸思想史――近世・近代編』（同、昭51・4）を書きおろしてひとくぎりつけた。『無常観の系譜』正続二編はA5版で合わせて百頁にも及ばんとする大著で、古代から近代まで日本で刊行された主要文献のほとんど全部に目を通した、前人未踏ともいうべき大作である。これを書きあげたとき「もうやることがなくなった。いよいよ隠居だ……」とわたしに語った西田先生の姿が目に浮かぶ。

日本文化史や日本人の精神史を仏教――無常観だけで体系化しようとするのは片手落ちだったと西田先生が口にしだしたのはこの二、三年である。考えてみれば、仏教が日本に伝来したのは六世紀、それ以前にも日本の国は存在したし日本人も生活していた。当然、文化もあれば精神史を

彩るなにかがあったはずだ。昭和五十年四月、愛知淑徳大学の開学とともにこちらに移ると、西田先生は大著を書いて隠居するどころか、美術に関心を向け出した。それも例によって古代からである。文献となるとさほど古いのはないが、美術史の方は文献の出現以前の古墳や埴輪が残っている。そこには明らかに当時の人びとの信仰が反映されている。西田先生が日本の神道やいわゆる土俗信仰や民俗学へ傾斜していったのはそれからである。仏のうしろに神がいる――仏教中心に論じてきた日本文化論も日本人の精神史もここから新たな展開を見せる。新潮選書『花鳥風月のこころ』（昭53・7）にその一部は披瀝されるが、今年一月発行の大学の紀要に発表した「神々の原像」を第一章とする『神と仏の対話』にまとめられる予定だった。その矢先最後の章をあとわずか残して、突然、神と仏の国へ逝ってしまった。

「神々の原像」はこうである――。

「死者の霊魂はいったいどこへ行ってしまうのか。こういう疑問に答えようとするためには、やはり死んでみないかぎりだれにもわかりようがない。」

（『西田正好先生』早稲田大学国文学会愛知県支部刊より転載）